

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目：特定領域研究
 研究期間：2005 ～ 2009
 課題番号：17083016
 研究課題名（和文） 儒学テキストを通しての近世的思考様式の形成
 －日中における対照的研究－
 研究課題名（英文） Formation of early modern Philosophy Through Confucian Texts
 －Comparative Study between China and Japan－
 研究代表者
 中村春作（NAKAMURA SHUNSAKU）
 広島大学・大学院教育学研究科・教授
 研究者番号：90172402

研究成果の概要（和文）：本研究で私たちは、東アジアにおける社会統治・統合と自己修養を語る普遍的な「言葉」として大きな力を有した儒学言説が、中国宋代、日本江戸前期において、どのようなプロセスで社会的意味を持つに至り、人間理解の基盤を形成したかを、個々の言説形成の型を対照比較することを通して、明らかにしようとした。以上の課題に即して、儒学テキストが、実際にいかに「読まれ」血肉化したかという点から「訓読」論という新たな問題領域を開発し、他方、経書の一つ『中庸』を取り上げ、その多様な解釈の姿を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

The discourse of Confucianism had a substantial influence as a universal “language” to discuss social rule/unity and cultivation of one’s mind in East Asia. This study, by contrasting/comparing among various types of individual discourse in its formation process, attempts to clarify how and through what process the discourse of Confucianism had come to bear social meaning and laid the foundation for understanding human-beings in Sung Dynasty of China and Early Edo Period in Japan. To explore this further, this study has also developed a novel subject area of study, i. e. “Kundoku (Japanese reading of Chinese Classics)” Theory, from the perspective of how Confucian texts were “read” in practice and body and soul of the contemporaries enriched. In parallel the Doctrine of the Mean of the Chinese Classics was highlighted in order to clarify how in a variety of manners it can be interpreted.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	5,500,000	0	5,500,000
2006年度	6,200,000	0	6,200,000
2007年度	6,200,000	0	6,200,000
2008年度	6,200,000	0	6,200,000
2009年度	6,200,000	0	6,200,000
総計	30,300,000	0	30,300,000

研究分野：思想史

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：思想史・中国哲学・東洋史・日本史

1. 研究開始当初の背景

- ①「近世的思考様式」形成の過程を、東アジアにおける世界時間の展開の視野の下に再考する、基盤環境が形成された。本研究担当者の個々の研究蓄積の総合化による、新研究領域の開拓が期待された。
- ②日本、中国の思想史研究専門家の相互乗り入れによる総合的研究の準備がなされた。「近世的思考様式」という課題を、日本思想史内部の問題、あるいは中国思想史内部の問題として狭く捉えてきた、従来の研究スタイルの脱却が求められた。
- ③実地調査、巡検を踏まえての思想形成と当該社会の実態とを総合して検討することの重要性が共通に認識された。近年の思想史、哲学史研究と社会文化史の融合の成果を取り入れることが求められた。

2. 研究の目的

- ①近世東アジアにおいて共通の言語となった朱子学言説の、個々の社会内での定着化過程を、テキストの受容、解釈の展開の中で、具体的に明らかにすること。特に中国、日本双方の当該社会のあり方と、知識人の位相、知識の流通の側面から、問題を統合的に解明すること。
- ②影響史的、交流史的視点を超えて真の学際的視野から、新たな問題領域を開拓すること。大きな「思考枠組み」が、東アジア世界に共有のものとして立ち現れるさまを、日・中の思想史の視点から、思想史の断面図として、構造的、理論的に提示すること。
- ③「近世的思考」のありさまを、儒学テキストに即して、次の二つの側面、ソフト（テキストの「読まれかた」）、ハード（テキストの流通）の両側面から鮮明化すること。そして、それをさらに大きく世界史的時間の中に置き直して考察すること。

3. 研究の方法

- ①日本思想史の方法と中国思想史の方法との相互乗り入れを、具体的分析作業を通じて実現する。素材・課題としては、「訓読」という「方法」への、東アジア思想世界からの再定義、四書の一つ『中庸』解釈の展開の位相を通観することを共通研究において採用した。
- ②中国、日本における、実地調査を踏まえて、

学説のテキスト化、社会内化を現場の視点から再検証する。中国においては、福建省を中心に、朱子学派の成立場面をその社会構造、共同体の位相とともに検証し、日本においては、土佐南学派、および薩南学派の学問形成場面を、検証した。

- ③（①に述べたように）共通重要課題を二つ設定し、国際シンポジウム等を踏まえて、その成果を公開する。中国、韓国、台湾等東アジア諸地域の研究者との討議を経て、問題の共有を図る。

4. 研究成果

- ①各年度ほぼ4～5回開催した合同研討会議を踏まえて、公開シンポジウム2回、ワークショップ2回を実現した。
（各シンポジウム、ワークショップの内容は以下の通り）
 - ・公開シンポジウム：「課題」としての「訓読」－異文化理解と日本伝統文化の形成－、広島大学、2006年7月29日
 - ・公開国際シンポジウム：「儒学テキストを通しての近世的思考様式の形成－一日中における対照的研究－」、大阪大学中之島センター、2008年12月13-14日
 - ・「にんぷろ」ワークショップ：「東アジアにおける〈訓読〉の思想文化」、九州大学、2007年7月21日
 - ・「にんぷろ」ワークショップ in 東京：東京大学、2008年7月26日
- ②共同研究作業の成果として、共著4冊を企画し、1冊をすでに期間中に刊行し、残りの著書も順次刊行予定である。
（各企画の内容は以下の通り）
 - 1) 『「訓読」論－東アジア漢文世界と日本語の形成－』、勉誠出版、2008年10月刊行済。内容は（ ）内参照。
（「なぜ、いま「訓読」論か」、「「訓読」の思想史」、「近代における「漢文直読」の由緒と行方」、「ビジン・クレオール語としての「訓読」」、「ベトナム語の「訓読」と日本語の「訓読」」、「日本における訓点資料の展開」、「近世における漢文訓読法の変遷と一齋点」、「漢文訓読体と「敬語」」、「国語施策と訓点語学」、「〈訓読〉問題と古文辞学」、「表現文法の代用品としての漢文訓読」、「日本漢文の訓読とその将来」、「漢文訓読の現象学」）
 - 2) 『「訓読」論Ⅱ－東アジア漢文世界の形成－』、勉誠出版、2010年夏刊行予定。予定内容は（ ）内参照。
（「文字の言語化」、「琉球における「漢

文」読み]、「漢文の訓読、階層性、トボスー『春香伝』の「千字文プリ」を手がかりに」、「唐通事の官話受容」、「江戸期における白話小説の翻訳小説の訓読」、「明治・大正期の漢文教科書」、「言語面からみた満州語性理字義文献」、ほか)

3) 『江戸期四書注釈論—東アジア海域交流から考える—』(仮)、汲古書院から刊行予定。内容予定は()内参照。

(「東アジア海域文化交流からみる四書注釈論」、「中国における中庸注釈の展開」、「王権と中庸—朝鮮期における—」、「徳川儒教と中庸」、「東アジアの中の林羅山」、「荻生徂徠の中の「中国」」、「近世琉球と朱子学」、「江戸期の中庸解釈・中庸論:山崎闇斎と崎門学派、山鹿素行、伊藤仁齋、荻生徂徠、懐徳堂学派、大田錦城、寛政正学派、陽明学派等の中庸解釈」、「朱熹『中庸章句』『中庸或問』論点解説、等」

4) 「にんぷろ講座」第五巻『「訓読」から見直す東アジア』(仮)、刊行予定。

内容予定は()内参照。

(「課題」として「訓読」を捉え直すこと」、「異文化理解の方法として「訓読」を捉え直す」、「東アジアにおける「知」の体内化と漢文の受容」、「「訓読」とともに形成された日本文化」、「「訓読」論からの視点」、ほか)

③ 「訓読」論という新たな研究領域を開拓し世に問うとうとともに、『中庸』テキストの解釈史に関して、従来の個別分野を超えた視点から、その東アジア的展開の様相をまとめ、著書として刊行予定である。また、すでに公刊・報告した成果は多領域の研究から高い評価を受けている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 44 件)

1. 田尻祐一郎、小楠の『論語』講義、環、査読無、別冊 17、2009、97-101
2. 前田勉、村岡典嗣を読む視点、季刊日本思想史、査読無、74 号、2009、3-8
3. 市來津由彦、黄幹における「為己の学」の表象、集刊東洋学、査読有、100 号、2008、162-181
4. 市來津由彦、鄭三峯と林羅山における教批判の位相、日本思想、査読無、13 号、2008、47-75
5. 中村春作、近代の「知」としての哲学史—井上哲次郎を中心に—、日本の哲学、査読無、8 号、2007、20-39
6. 中村春作、東アジアの古学と荻生徂徠、

民族文化論叢、査読有、31 号、2005、329-362

…ほか。

[学会発表] (計 10 件)

1. 市來津由彦、朱熹門人は師朱子から何を受け取ったか—黄幹における「学び」の表象—、国際学術会議「宋代新儒学的精神世界」、上海復旦大学、2008 年 10 月 26 日
 2. 市來津由彦、鄭三峯と林羅山における仏教批判の位相、三峯学学術会議、ソウル大学、2007 年 12 月 6 日
 3. 前田勉、南里有隣『神理十要』におけるキリスト教の受容、日本思想史学会、長崎大学、2007 年 10 月 21 日
 4. 中村春作、東アジア海域交流から見る近世前期日本儒学の問題、台湾大学京都国際シンポジウム「東アジアの経典と文化」、京都大学、2007 年 7 月 28 日
 5. 田尻祐一郎、江戸思想の中の『論語』、「東亜論語学国際学術研討会議」、台湾大学高等研究院、2007 年 6 月 30 日
- …ほか。

[図書] (計 19 件)

1. 中村春作、田尻祐一郎、ほか共著、東亜儒学研究叢書・東亜論語学—韓日篇—、台大出版中心、2009、1-497
 2. 中村春作、田尻祐一郎、ほか共著、経書解釈の思想史—共有と多様の東アジア—、ペリかん社、2009、1-278
 3. 前田勉、江戸後期の思想空間、ペリかん社、2009、1-470
 4. 中村春作、市來津由彦、田尻祐一郎、前田勉共編書、「訓読」論—東アジア漢文世界と日本語—、勉誠出版、2008、1-356
 5. 田尻祐一郎、荻生徂徠、明德出版社、2008、1-332
 6. 田尻祐一郎、山崎闇斎の世界、ペリかん社、2006 年、1-317
- …ほか。

[その他]

ホームページ

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/maritime/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 春作 (NAKAMURA SHUNSAKU)
広島大学・教育学研究科・教授
研究者番号: 90172404

(2) 研究分担者

市來 津由彦 (ICHIKI TSUYUHIKO)
広島大学・文学研究科・教授

研究者番号 : 30142897

田尻 祐一郎 (TAJIRI YUICHIRO)
東海大学・文学部・教授
研究者番号 : 80171700

前田 勉 (MEDA TSUTOMU)
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号 : 30209382